
《贖罪》なんかじゃない

河野夜兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『贖罪』なんかじゃない

【Zコード】

Z5796

【作者名】

河野夜兎

【あらすじ】

中学最後の作業。『卒業文集』を書かなければいけない。でもね、書けないんだよ……。
書けない理由?それはね……。

生まれた時から、人の生きる道つて何となく決まつているような気がした。

自分で選んでしつかりと生きてるなんて周りや大人は言うけれど、実は自分で選んでるんじやなくて、ただそう進んでいくしかない、決められた道があるんじやないかと私はいつしか思うようになつていた。

人は誰しもが平等つてワケじやない。

『器用』な人間は世の中を上手く渡つていける。

反対に『不器用』な人間は日の日に恵まれないどころか、自らを消滅させてしまう程の深い闇に追いやられる事だつてある。

望んでも決して届かないモノはある。

手を延ばす事すら恐れる眩しい『光』は、実は『漆黒の闇』なんじやないかと何となく思う。

ただ、それを認めるのは恐い。

だから、『妥協』といつ名の諦めの隠れ家に身を置くのが、今の私の決められた道。

それは決して自分で選んだんじやなくて、そうしなきゃいけなくなつた。

これもきっと何かから指示をつけて組み込まれたモノなんだと納得はしている。

だつて、隠れ家を利用しているのは、私だけじやないから……。

目立つ事はしない。

静かにひつそりと、適度にやんわりと人に不快感を与える、決定的な印象すら「えない」ように、日々をやり過げます。

『余計なアクションは起こさない』

それがこの現実を生きていく為の私の小さくも最大の防具なのだ。

だつて、そうしないとね……きっと……。

「神谷さん……」

教室の北側の一一番後ろで座る私の肩をポンと叩くのは、クラスの委員長の山岡^{やまおか}佐惠さん。

「……。」

私は無言で振り向き、山岡さんから視線を外して、用件を伺い待つ。

「卒業文集の原稿、まだ提出できていないの……、後神谷さんと三谷君だけなんだけど……」

山岡さんは少し困った顔で私を見つめる。

しまった……すっかり忘れてた卒業文集……。

まだ一行も書けてない。

「ごめんなさい……あの……まだ……最後まで書いてなくて……。」

「私はも「ごめんなさい」と口もりながら山岡さんに手を上げた。

「提出期限、明日までだから、必ず出してね。」

やれやれと言つた感じでやんわりと愛想笑いを浮かべて小さくため息をひとつつき、山岡さんは歩き出す。

その行き先はもう一人の未提出者の三谷君の元。

「三谷君、卒業文集できた?」

賑やかな雑談がひしめく教室の中で、何故だか山岡さんの声がくつきりと輪郭を浮かせて耳に入ってくる。

「あ？…ああ。」

南側の一番前の席で、眠た氣な顔を山岡さんに向けて、机の中を『ヤレヤレ』と漁り、くしゃくしゃになつた紙切れを三谷君は無言で山岡さんに差し出した。

「何よ…これ。」

山岡さんは不快感をあらわにして眉間にしわを寄せつつも、紙を伸ばして文章を確認する。

「ちよつと…何よ…これは…ちゃんと眞面目に書きなさい…。」

山岡さんは大声をあげて三谷君の机をバンッ…と叩いた。賑やかな教室は途端にしんと静まり、その視線は一斉に山岡さんと三谷君へと向けられた。

「かなり、大まじめに書いたんだけどな。」

三谷君は面倒臭そうに嘆息して、やんわりと口の両端をあげる。

「ふざけないで…中学最後の大変な卒業文集なのに…。」

大まじめに書いた文章が『馬鹿げた毎日』だけって、一体どうこうつもりよ…！」

山岡さんは三谷君を睨みつけて怒声を放った。

「読んだまんまだよ。ただそれだけ。」

悪びれる事もなくわらわといつ放つ三谷君に、山岡さんはますます怒りのメーターを上げていく。

「そりやつていつまでも周りを受け入れずに自分から進んで孤立していくから！だからたいした思い出も何も残らないんじゃない！」

そう怒鳴る山岡さんに三谷君は、

「うぜーな。そりやつ自分で押し付けがましい暑苦しつてよ…。」

そう言つた次の瞬間…ガツッ…と机を蹴り飛ばして立ち上がり

「テメーらの尺度を当たり前のように人に押し付けて！知らぬ存ぜぬで間違いを認めず歪んだ正義振りかざしやがつて！」

はつ、さぞ楽しい毎日だつただろうな……」

三谷君は鋭い言葉と眼光を放ち山岡さんを見下ろすと、

「…クラスん中で人が一人死んでんのに、中学生活は楽しかつたつて笑うお前らの方が、俺はよっぽど頭がイカれてると思うね……。」

そつづぶやき、教室を出て行つてしまつた。

蒼白して震える山岡さんの瞳からはぽろぽろと涙が零れていた。周りにクラスメイトが寄り集まり、「大丈夫？」とか、「佐恵ちゃんは悪くないよ」とか「最低だよー三谷！」とか言つて山岡さんを慰めている。

何だか滑稽だな…とにわかに笑いが込み上げそうになるのを堪えて、南側の一番後ろの席があつた場所に視線だけをちらりと向ける。

半年前にはそこに席があり、確かに息をした住人があつた。

今はその息使いも、彼が存在していたカケラ・・空席すらうないただの南側の一角。

(時間てのは本当に無情で残酷だね…)
何となく心の中で呟いてみた。

先刻の三谷君の凍るような冷たい目、言葉が頭の中で反響する。
(熱くなつても仕方ないじやん…。そんな事したつて山浦はもう、
この世にはいないんだから)

徐々に喉の奥が詰まりそうな不快感を払拭したくて、私は深く息を吸い込んで、目を閉じてゆっくりと吐き出す……。

脳裏に浮かぶのは、山浦明彦の虚ろな顔。やまうらめいげん

彼は半年前に自らの手で生きる道を絶つた。この中学校の近くの山林で太い木の枝にビニール紐を巻き、首を吊つたのだ。

原因は表向きは『心の病気』
でも、本当の理由は……イジメ。

山浦は、このクラスでいつもひとりぼっちだった。ううん、正確に言えば一人じやなかつたけど。

三谷君だけは、山浦の唯一の味方だったと私は思つ。

このクラスで元々物静かな山浦に話しかける人間は誰もいなくて、いつもひつそりとひとりぼっちだった。

いつから、どうして山浦がこのクラスで孤立したのかは私にはよくわからない。

気がつくと、山浦は誰に話しかけても、なんの反応もされずにシカトされて、山浦明彦と言う人間の存在は、このクラスには無いモノと扱われていた。

勿論私も意味が解らずとも、何となくそのシカトに加わってた、いちクラスメイト・・・加害者だ。

理由は簡単。

自分を守る為だけという、本当に簡単な理由だ。

丞先が自分に向けられるのに怯えを抱き、何となく周りに歩調を合わせた。

血口防衛だと言つのは言い訳に過ぎない事も自分なりに理解しているつもりだ。

唯一話しかけていた三谷君も、このクラスでは元々別の意味で浮いた人間だった。

勉強も運動もよくできる人だけど、口数は少なくいつもどこか人を嫌い寄せ付けない空気を出していた。

何となく人に歩み寄るタイプではないと思つてたけど、山浦にだけは何だか心を許していただけの氣がした。

山浦の何に惹かれるのかは解らなかつたけど、どちらかと云つて、山浦が三谷君を必要としているんじゃなくて、三谷君が山浦を必要としているよつこも見てとれた。

でも山浦は死んでしまつた。

彼の遺書には、

『僕は弱い人間です。『ごめんなさい』
とだけ書かれていたらしい。

クラスメイトは皆、通夜で泣いてた。

後悔の涙？同情の涙？

多分、どれも当て嵌まらない。

そこには山浦の死を『悲しい』と感じる涙はなかつたと思つから。

罪逃れの為の涙。それが正解かな……。

じやなきや、たつた数カ月でこのクラスが何事もなかつたように

平穏で穏やかな空氣に包まれるワケがない。

「Jのクラスで通夜の時に泣かなかつたのは、三谷君と私だけ。

私の中に残つたモノは、紛れも無く逃れる事のできない罪の意識で。

三谷君に残つたモノは、きっと……怒りだろつ。

何となくそう思つ。

でも、私は心でそれを認めても、決して罪滅ぼしの言葉は口にしない。

だって、加害者は私だけじゃないから。

このクラス、三谷君を除く先生を含めた全員が加害者なんだから。

その加害者の誰もが山浦に対して贖罪の言葉を口にしないのなら、私が一人が謝罪したってそれは意味がない事だと思うから。

加えて、死んでしまつた人間にごめんなさいなんて届くワケがないから。

人は死んだら終わり。

ただ灰になり、骨になり、墓石の下に撒かれるだけ。

そこには人格も感情も思考も何もない。

そこには『無』しかないと私は思つている。

だから、山浦は死ぬ事を選んだ。

うつん、選んだんじやなくて……

そうしなきゃいけない道が出来ていた。

その道へと進めたのは…………

(まら…やつぱり人の道なんていつのま、自分で選ぶんじゃなくて、何かしら決められてるんじやん……)

私は視線を教室の端から端へと流した。

先刻まで泣いてた山岡さんはもう元通りで、友達と称される人達に笑顔さえ浮かべている。

(なんか、気持ち悪い)

急に言つてみたのに吐き気に襲われ、私は立ち上がりトイレへと駆け込んだ…………。

もう、こんな吐き気が半年間ずっと続いてる。

(卒業文集…書けないや…………)

私は言つてみたのに不快感をトイレに吐き出しつづくまつ、声を殺して震えた。

仕方ないんだ。

これも、自分で選ぶ事なくこうなつてしまつた道なんだから…………。

私は《諦め》と叫び隠れ家に身を潜める。

本当はこうするべきだつて感情を押し殺して生きしていく道を選ぶしかないのは…………。

仕方ない事でしょ？

だつて、私は三谷君みたいに強くはないんだから…………。

三谷君はその日、学校へ戻る事はなかつた。

それでも時間は当たり前のようく進み、淡々と授業はこなされて、教室はいつもと何も変わることなく賑やかさが溢れている。

私はその異質な空間に対する吐き氣を感じながら、今日も仕方がないんだとやり過ごす。

結局卒業文集は書けないまま。

放課後、私の足は何故だらう？

山浦が命を絶つたあの山林へと向かっていた。

静かな山林。

まるで何事もなかつたように、そこに広がる鬱蒼とした木々の景色を見つめ歩くと、何故だか緑色が黒に見える。

落ち葉は灰色にさえ見える奇妙な感覚に軽く眩がして、足元がふらついた。

でも、私の足は止まる事なく山浦がいた場所へと進んで行つた。

思考と行動がちぐはぐして気持ちが悪い。

指先が痺れを帯びて、体の奥深くから言い表せない震えが立ち上る。

「あ……、」

私は目の前の光景に小さな声を上げた。

「……神谷。」

私の気配と声に気が付き、振り向きた名前を呟いたのは三谷君だった。

私は立ち止まり、俯いて言葉を発する事ができずにいた。そんな私に、

「こんな場所に俺以外のクラスメイトが来るなんてな……。」

三谷君は皮肉混じりにそうつぶやくと、また木を見つめて立ち尽くした。

山林の木々の中で一際大きな存在感がある木が一本。

背丈はさほどでもないけど、幹はびっしりと太くて枝も丈夫そうだ

……。

否応なしに枝の一力所に視線が走る。

枝には、人工的な擦り傷の後。

ああ……、あの枝に山浦が……。

そう考えると無意識に両拳を握りしめ、唇をギュッと噛み締めていた。

「……山浦は……、本当素直過ぎるくらい素直な奴だった……。」

三谷君も私と同じように枝を見つめて、小さく呟いた。

「……自分があのクラスから孤立したのは、自分が至らないからだつて……。

知らず知らずのうちに、僕は人を傷つけているんだ。だから、みんなから嫌われたんだって……」

三谷君は震える声で、山浦の心の内を明かした。

「俺はそんな山浦の素直さが大好きで、大嫌いだった……。あいつに何度も聞く「理不尽」と闘え」と言い放った。でも、山浦は……いつ

も「悪いのは僕なんだよ……」って…………あいつは何も悪くないのにな……」

三谷君は声を詰まらせて俯いた。

震える背中から滲み出るのはきっと後悔と自責の念。

「どうして? どうしてもつとあいつを理解してやれなかつたんだろう…

あいつの苦しさを少しでも取り扱う事ができたら…………」

「そう思つて、三谷君が山浦の事で泣いてゐるのは、紛れも無い自分の素直な気持ちの選択……」

俯き、袖口で田元を擦る三谷君を見ていたら、自分の中の『吐き気』が言葉になり、溢れ出してた。

「…クラスん中で人が一人死んでんのに、中学生活は楽しかつたつて笑うお前らの方が、俺はよっぽど頭がイカレてると思つね……って三谷君の言葉、あれ…本当だよって思つた。」

半ば驚き振り返る三谷君に、もうこの世にはいない山浦が最後にいたこの田の前の木に、私は鬱積した『吐き氣』を言葉として吐き出す。

「でも私も山浦をシカトした加害者だから「本当だよ」なんて思つのは馬鹿げてる。

明るい教室に吐き氣がするのも、何の氣無しに笑つてゐるクラスメイトに眩がするのも、馬鹿げてる。

これは自分が選んだ道じゃない! 誰かが勝手に作った道を歩かされてるんだ! だから山浦が死んじやつたのは私のせいじゃない! つて逃げおおせようとする自分自身も全部馬鹿げてる!」

こんなにも、怖いくらいに喉が震えて苦しめて、言葉は止まらない。

「立派な加害者なのに! 山浦に『めんねも言えない馬鹿な自分を、周りだつて認めて謝らないじゃんてなすりつけて逃げおおせてる。なのに、クラスメイトに、教室に嫌悪感を抱いて毎日毎日学校来る

度にトイレで吐いてる…。頭ん中と行動がちぐはぐで、でも、それは…仕方ない事なんだって…。仕方ない事…なんだ…って…。

「

言葉を吐き出すと共に、視界が霞み、頬から伝うモノが、セーラー服の胸元に弾け落ちて、枯れ葉にボタボタと落ちる。

「卒業文集なんて…………書けるわけ……ないじゃん…………。山浦が死んじやつ……て 加害者の私が……楽しい……ワケ…………ない…………」

……

やつと言えた言葉。

『隠れ家』に逃げこんだ私。

自らが選んだ道を、誰かのせいにして逃げこんだ私。

今は自分自身が選んでこの場所に歩き訪れ、そしてこの場所で本当に言いたかった言葉がやつと言えた…………。

それは決して罪償いにはならない。

自己満足なのはわかってる。

いくら後悔したって、謝ったって、山浦の命はもつ戻っては来ないから…………。

「逝つてしまつた奴の気持ちは俺にも解らない…。」

三谷君はゆっくりと木に近付き、その幹をやつと撫でながら、「死んだ人間に対しても許して欲しいなんて、生きてる奴の勝手な言動だよな……。

だけどな、そう思わないより、そう思えるのほうが俺はいいと思つ…………。

三谷君は真っ直ぐに私を見据えて、

……

「後悔の気持ちは、一生忘れる事ができないから。忘れないって事

は、同じ過ちを繰り返さないって事に繋がると思うから。だから俺も神谷も、山浦を絶対に忘れちゃいけない。『これからも生きていく人間』として。』

三谷君は寂しそうに口元に小さく笑みを浮かべた。
私は言葉なく頷き、木に深く頭を下げる両手を合わせて目を閉じた。

(本当にみんなさい。山浦にした事、山浦の事絶対に忘れないから。……もう一度と、同じ過ちを繰り返さないに為に…)

心の中でそう山浦に誓つた。

山林から一人で帰路につく。

「卒業文集…書かなきや…。」

私は小さく呟いた。

「ああ…、間違いなく俺も書き直しだらうな。」

三谷君はため息混じりに呟いた。

「楽しかった事なんて書けないけど…、鎮魂歌レクイエムなら、書けるような気がするな。」

三谷君の言葉に、

「私も…同じ事考えてた。」

驚き混じりの私の顔を見つめて、

「神谷つて、そんな表情かおもできるんだな…お前、いつも能面かぶつてるみたいに無表情だから。」

やう言つて口元に小さく笑みを浮かべた。

(仮面を外してくれたのは三谷君だよ…)

もちろん口には出せなかつたけど、少し俯き歩く私の口元はきっと

ほんの少しだけ
.....
。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5796j/>

《贖罪》なんかじゃない

2010年10月19日01時26分発行